

氏 名 (本 籍)	寒 川 恒 夫 (和歌山県)
学 位 の 種 類	学 術 博 士
学 位 記 番 号	博 甲 第 113 号
学 位 授 与 年 月 日	昭和56年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	体育科学研究科 体育科学専攻
学 位 論 文 題 目	稲作民伝承遊戯の文化史的考察—東アジア・東南アジアを中心として—
主 査	筑波大学教授 教育学博士 岸 野 雄 三
副 査	筑波大学教授 教育学博士 浅 田 隆 夫
副 査	筑波大学教授 教育学博士 松 浦 義 行
副 査	筑波大学教授 芳 賀 登
副 査	筑波大学教授 鈴 木 博 雄

論 文 の 要 旨

本論文は東アジア・東南アジアの狩猟採集民，耕作民に伝承されている儀礼遊戯のうちで民族誌的資料からみて研究に耐えうると考えられた綱引，競舟，球戯，蹴闘戯，ブランコの 5 種運動遊戯を取りあげ，これらの遊戯が水稻耕作民の伝承遊戯として，東アジア・東南アジアの文化史上いかなる位置を占めているかを明らかにしたものである。

第 1 章綱引では，その分布，時期，対抗組の編成，場所，綱の材料，儀礼的特徴などに関する検討を加え，さらに総括的に綱引文化複合の構成要素，綱引の担手などについての考察を行い，歴史民族学的な立場から綱引の文化史的位置づけを試みた。

これを要するに本章では，(1)綱引の分布は南北朝鮮，日本，南中国，東南アジアの大陸部（アッサムを含む）と，島嶼部のすべての民族にわたっていること，(2)この地域の水稲耕作民のほとんどすべてが綱引を実修しているが，焼畑耕作民ではその 1 部が，さらに狩猟採集民では僅かにサカイ族だけが実修しているに過ぎず，しかもそれらの綱引は稲作民からの伝播とみられる諸状況を示していること，(3)綱引はインド北西部とカムチャッカ半島にごく小規模の分布が，オセアニアに比較的大規模の分布がみられるが，オセアニアの事例は南中国，東南アジアからの伝播と考えられるけれども，現在の資料収集段階からみて，他の周辺地域まで拡大して伝播関係を論ずることは困難であること，(4)綱引を総括して文化史的に言えば，男女対抗で行われる新年の性的豊穰儀礼として，

水稲耕作民文化層に位置づけられること、(5)この共通性の上に、女子の勝利を豊穰とみる観念、網蛇体観、網の宗教的処理の要素が加わり、民族毎に個性化された綱引に発展していったことが明らかにされた。

第2章競舟でも、前章と同様な視点からの考察が行われるが、これを要するに本章では、(1)競舟は日本の1部、南中国の漢族、貴州省の黒ミャオ族、タイ・リュウ族、ベトナム族、ラオ族、クメール族、シアン族、ビルマ族、メイティ族に実修され、それらは水稲のための水統御の儀礼として行われていること、(2)競舟は狭長舟（独木舟）を使用し、操舟の技術的特色は固定舵を用いず櫂で漕ぎ、場所も海でなく比較的大きな河川と湖を主として挙行され、しかもその舟は神的な水海動物（龍、蛇、ナーガ）とみなされるところに共通性がみられること、(3)その重要な機能としての水統御については2つの地域差が認められ、南中国型（南中国、日本、ベトナム）と東南アジア大陸部型があること、(4)南中国型は雨季開始の旧暦端午をその時期とし、感光度の低いジャポニカ水稲のための降雨増水を目的とした儀礼競舟であり、これに対して東南アジア大陸部型は雨季明けを画す新暦10月に当る出安居祭ごろに挙行され、稲田の減排水を目的としたものであること、(5)南中国型よりも新しい東南アジア大陸部型は、東南アジアに感光度の高いインディカ稲が栽培されて以後に実修されるようになったこと。(6)競舟は水稲耕作民文化層に帰属される儀礼競技であるが、しかも競舟が綱引よりも後の段階に位置づけられる理由は、南中国と東南アジア大陸部の山間溪谷に住み、しかもより古い水稲耕作民文化を維持するタイ系少数民族のほとんどが競舟を実修していない事実からも推定できることが明らかにされた。

第3章球戯では、特にボールの材料と球戯形態、その変化、結婚習慣とその社会機能との関係などについても詳細な検討が加えられたが、これを要するに本章では、(1)南アジアと東南アジア大陸部では、未婚の男女が相対し、彩色織布や絹布で作ったボールを投捕し、その仕方で結婚の意志を表示する球戯として行われていること、(2)これを実修する民族は南中国とトンキンに住むタイ系少数民族のチュアン族、チュン・チア族、タイ・リュウ族、トー族、タイ・カオ族、タイ・ダム族、トンキンのベトナム族、クメール族、シアン族、南ラオスのラオ族などの水稲耕作民であること、(3)これに対して焼畑耕作民はトンキンのマン族、南中国から東南アジア大陸山地にかけてのミャオ族が実修していること、(4)諸般の状況から判断して、約婚球戯は焼畑耕作民文化層に帰属できる歌垣に、その直接的発生母体を有するが、しかし約婚球戯は水稲耕作民文化層のごく初期の段階において成立したものであること、(5)マン族とミャオ族の球戯実修は焼畑耕作民文化層に帰属するものとみるよりも、むしろ水稲耕作民からの伝播と推定されることなどが明らかにされた。

第4章蹴闘技では、特に蹴闘技の3型の競技法、その形態と名称の対応、3型の前後関係などについても詳細な検討が加えられたが、これを要するに本章では、(1)脚蹴りを用いる格技がインドネシア、フィリピンの1部、マダガスカル島、アッサムの1部で実修されているが、この蹴闘戯はアッサムのサマ・ナガ族を除いて、その実修民はマライ人に限られること、(2)蹴闘戯は3つの型に分類されるが、その第2型は分布域の中央部（中部インドネシア）にみられ、第3型は第2型の1部に分布し、第1型は分布域の全体にわたって実修されていること、(3)蹴闘戯は第1型→第2型→第3

型と変化したものであり、第2型は新マライ人層に位置づけられるが、第1型は、それを最古マライ人層に位置づけることが困難としても、古マライ人層に位置づけることができることなどが明らかにされた。

第5章ブランコでは、特にブランコの構造、乗り手、伝播ルートなどに関する詳細な検討が加えられたが、これを要するに本章では、(1)紀元前2千年紀中ごろに始まるヴェーダ時代に、すでにホートリ司祭の営むヒンズー儀式として儀礼的ブランコ (prenkha) が知られていたこと、(2)ブランコには座板を2本の綱で吊した第1型と、1本の綱を輪にしたもの、または1本の綱の両端を枝などに結んだ第2型と、両者を混交した第3型があること、(3)第1型はインド形態であるが、第2型はメラネシアに明らかのように、第1型以前の痕跡が認められるものの、用具以外は不明で、いかなる文化複合と関係するかも問題であり、第3型は第2型に第1型の影響がみられる変型と推定されること、(4)インドの儀礼的ブランコは天地あるいは聖俗両界を媒介する儀礼具で、太陽呪術、豊穡、多産、結婚といった儀礼的側面を有し、天父地母聖婚観を背景とした遊戯であり、また東・東南アジアのブランコはインドからの影響であることなどが明らかにされた。

結論として、東・東南アジアの5種遊戯においては、狩猟採集民的文化層に位置づけられるものはない。焼畑耕作民文化層に位置づけられるものは蹴闘技と考えられる。綱引と競舟と球戯は水稻耕作民文化層と位置づけられるが、これらのうちで最も古い段階に入れられる遊戯は歌垣を直接の母体とした約婚球戯であり、綱引は球戯よりも新しいが、競舟よりは古い段階に入れられる遊戯である。これに対してブランコは、ヒンズー文化の東漸に伴ってインドからもたらされたもので、水稻耕作民文化層としては最も新しい遊戯と考えられる。

審 査 の 要 旨

19世紀末にB.TaylorのThe History of Gamesが発表された頃から、遊戯に関する民族学的な論文も現れるようになった。20世紀に入ってから、北米インディアンを対象としたS.Culin、あるいは南方諸族を対象としたH.Dammなどによって、遊戯研究に関する力作も発表され、1926年にはK.WeuleのEthnologie des Sportsの試論さえ現れるようになった。しかしながら、これらの研究は東アジア、東南アジアに関する限り、民族誌的にも民族学的にも不十分であり、歴史民族学でいわれる文化史研究は未着手の状況にあった。

第2次大戦後は、当該地域についても次第に研究の関心が強くなってきた。しかしそれらの研究は、遊戯の宗教的機能や意味の究明、遊戯の背景にある世界観の解明、あるいはシンボリックな視点からの遊戯の解釈などに重点が置かれた研究であった。したがって、歴史民族学でいわれる民族文化史の立場からの遊戯研究、あるいは当該地域を総合的に扱った研究は、ほとんど手が着けられなかったといえよう。著者はこの点に着目したのである。

著者は、これまでの世界的規模の「文化圏説」(Kulturkreislehre)の誤りを踏襲することなく、

Heine-Gerdern, B.Vroklage, W.Eberhardなどの諸成果を背景にして当該地域に伝承された遊戯の調査を行い、上記5種の遊戯が焼畑耕作民と水稻耕作民との間に広い分布を示し、それらが多かれ少かれ儀礼的に実修されていることを解明した。このようにして、遊戯の地域文化史的研究を新しく試みたことは、まことに時宜をえたものと考えられる。

もちろん、文化複合と文化層などの文化史構想に関する基本的問題をはじめ、5種以外の遊戯をも含めた総合的な比較考察など、なおも今後の課題として検討されねばならない個所もある。それに本論文には、著者も指摘しているように、タイや沖縄などの現地調査にもかかわらず、仮説を確証するにいたらなかった個所も若干ある。しかし、それらは新しい研究分野に着手したスポーツ史研究者としての当然の今日的限界であり、むしろ本論文があえて困難な先駆的研究に挑戦した点を高く評価したい。

よって、著者は学術博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。